

学的研究を志向して、一步を踏み出したいと決意した次第である。この方向における関心を、研究者と教師の集まりである「学習指導研究会」（昭和51年7月第1回例会）の活動を通して深めていきたい。

4. その他の活動としては、福村出版、大橋正夫・長田雅喜編、「心理学」（昭和51年4月刊）第4章第1節「学習とはなにか」、第2節「学習成立の型」を執筆した。また、黎明書房、大西誠一郎監訳、「児童心理学三つの理論」(Maier. Three theories of child development昭和

51年7月刊)の第3章「ピアジェの認知理論」を翻訳した。名古屋市青少年問題協議会より昭和50年度家庭教育問題調査専門委員の委嘱を受け、他の諸委員とともに「家庭教育資料——子どもの余暇利用の実態と家庭教育」名古屋市教育委員会(昭和51年5月)をまとめた。また、昭和49年度より特定研究科学教育「CAI算数・数学コースプログラムの開発と実験的実践化の研究」(代表者・国立教育研究所 主原正夫)に研究分担者として参加してきた。

2 年 目 の 経 過 小 嶋 秀 夫

2年目にして早くも繁忙となり、研究面でも教育面でも成果は不十分であった。今後は、仕事の方式を改めてより効果的な処理様式に切りかえる必要がある。

1. 親子関係に関しては、次のような点から、過去50年の研究の理論的・方法論的分析と評価を行うことを立案した：研究目的とその社会的背景、理論、概念と測定、結果と、それが学界と社会に及ぼした影響。この分析・評価の対象となる理論や問題：精神分析理論、Hall & Lindzey のいう社会心理的理論、学習理論、「経験と知的発達」の研究、認知的社会化の研究、比較行動学的研究。

2. いわゆる「認知様式」の領域での諸概念の測定に関しては、いくらかの知見が得られた。KaganのMFFの問題については、漸く1つの手掛りが得られ、日本心理学会第39回大会に一部を発表した。また、*Perceptual and Motor Skills*, 1976にも、精神測定上の問題として現われることになっている。WitkinのEFTに関しては、筆者が従来使用したものを改訂し、就学前幼児と低学年児童用のPEFTを作成した。15項目での内的整

合性は、5歳児で.89が確保できた。RFTに関しては昨年に開発した装置(ポテンショ・メータによる角度検出とディジヴォル・メータによる角度表示)に、ELによる刺激提示パネルをつけ、可搬性のある組立式暗室(1.8m×1.8m×3.5m)内で使用を始めた。MFF, WPPSI, PEFT, RFT, ラテラルティーなどからなるバッテリーを120名以上の幼児に施行した結果は後日発表される。なお、この研究に際しては、昨年に検討した児童研究の倫理問題のテスト・ケースとすることを考えた。

他のテーマに関しては、内外の研究者と若干の討論を行ったにとどまった。今年も学内の技官、学部の院生・学生諸君から、多くの協力をいただいたことを感謝したい。

なお、筆者は幸いにして、1976年8月から1年間、ハーバードを足場にして研究するチャンスが与えられることになった。この機会に、上述の1と2の研究を進めるとともに、広範囲のアイデアや研究結果に触れることを期待している。この経験を、研究面と教育面の両方に活かすことができればと思っている。

研究経過報告 —この8カ月の歩み— 田 畑 治

昭和50年8月1日より当教室のスタッフとして加わり、すでに半年以上経過している。着任後、10月24日に行なわれた就任講演は、「カウンセリングの実践と研究から学んできたこと」と題して、「いまここでの私」、これまででの私、そして「これからの私」をパーソナルあるいはプライベートな世界にまで言及しながら行なった。この講演で、名大着任の「イニシエーション」の意義を明らかにしえたと考えている。

さて臨床心理学は、きわめて主観的色彩の強い実践の世界での諸事象に目を開き、かつ客観的に記述し研究することを要請する。それは至難のわざであり、粘り強さが要求されると痛感している。研究者の倫理性や生き方も深くかかわってくるからである。

着任以来、ここに半年余りにわたって手がけてきている一連の研究を報告し、問題意識の一端を明らかにしたい。